

## 冷凍庫のワカサギ

田村 奈実

冷凍庫には1匹のワカサギがいる。父が釣ったワカサギだ。このワカサギを見る度に、あの日のことを思い出す。

JR内房線を降りて、五井駅から始まる小湊鉄道に乗り換える。とガラリと雰囲気を変化した。それまでのIC決済から車掌への切符の手渡しに切り替わったことや、住宅街から畑が増えてきた所、単線になった所、駅舎の風貌。いよいよ高滝へ行くのだと言う実感湧いてくる。

「見ろ、奈実！キハ40形車両！2021年より導入された小湊鉄道の主力車両だぞ。はあー！オレンジとアイボリーのこの色がまた、明るくって良かねえ！」

父は電車が好きだ。若い頃は仕事が忙しくてあまり電車に乗れず、分厚い時刻表を買っては夜な夜な、どこで乗り換えられるか考えていたらしい。

「ほらほら、こつちも見てごらん。車両の中に扇風機がついているやろう、あれは昔の電車に当たり前のごと付いとってねえ。懐かしいねえ。」

「そうなの？すご、それは珍しいね。」  
周りの人が迷惑そうに咳をする。長崎の片田舎から出て来た父の声がきつと大きすぎるのだろうか。

「声、少し大きいみたいよ。」

「うん？そりゃー悪い事したあ。」

父の大きい声に恥ずかしい思いをするのはいつもの事だ。いくら注意しようとも車内中にまるで物語を聞かせているのだ、とでも言わんばかりに響く父の声。

「良かー景色やね、春には菜の花の咲いて、キレイかつちやろうねー！」

懲りずに大声で話しかけてくるのでため息をつきながらそうか、これも最後かもね、とも思った。

「ここで菜の花が咲いたら電車の色と合わさってキレイだろうね。」と相槌を返す。電車が高滝に近づくにつれて、外の景色は田んぼや畑一色になってくる。

「なんだか長崎の実家と似たような感じになってきたじゃない？」

と父に聞くと、

「そうやねえ、似てきたねえ。千葉まで来て似たような景色のあるとは思わなかった。」

五井駅から数えて11駅、40分程で目的の高滝駅に着いた。ローカル特有の無人駅。多分、木製で出来たであろう駅舎は長椅子が2カ所あり、雨風を凌げるような造りになっている。

「あらー、猫ちゃんのおるやんか。」

父の言葉に振り返れば、長椅子の陰に真っ黒な猫がいた。ふっくらして、人に慣れているのだろうか、足元をスリスリする。

「あんだ、人に慣れとるとねー！」

動物好きな父の喜ぶ声が聞こえる。

「可愛いでしょう、この子。毎年ここにいるんだよね。」

結婚を機に埼玉へ引っ越して、今年で5年。毎年冬になると高滝湖へとワカサギ釣りに来ているが、来る度にこの子がお出迎えをしてくれるのだ。

「かわいさー、喉ばゴロゴロ鳴らしよる。エサになりそうなものなあーんも持ってなくて、ごめんねえー。」

と父が謝って、10分程撫で回すと、猫は満足したのかどこかへ行ってしまった。

「膝の上にも乗ってくるのよ。」

「あらそうねー、それは可愛いかしいー！」

「じゃあそろそろ行かなくっちゃ。」

私が急かす。

「そうね、急がなきゃったね。」

そう、ここからは少し急がないといけない。高滝湖では毎年10月から2月までワカサギ釣りができる。乗り物がボートとドーム船のどちらかを選ぶのだが、寒さの凌げるドーム船はすぐに埋まってしまう。高滝駅を降りて県道168号線を左折し鶴舞方面へと行くと徒歩20分程で着く予定だ。急な坂を越えて、高滝湖にかかる長い橋を歩いていると右手側に目立つトンボのモニユメントが現れる。父に教えようとした時だった。

「奈実い、ちょっと待ってー、膝の痛かー！」

出た！父の膝の痛み。ちょっと歩くとすぐこれだ。

「大丈夫？最近全然歩いてないもんね、それに風も冷たくって膝

に響くでしょう？」

思い出してみれば、父が膝を痛いと言うのはいつからだっただろう。確か5年から6年前からだっただような気がする。歩みの遅くなった父とペースを合わせながら湖に目を向ける。

「お父さん、ちょっとあそこ、湖きれいだよ。」

「俺は今、そがんどころじゃなーい。」

景色どころではないまま受付へとたどり着いた。予定よりも遅れたがまだ7時そこそこだ。父にしては頑張った方だろう。

「ボートもあるけどさ、こんなに寒かったらドーム船のほうがいいよね。」

私が問いかけると、

「良か良かー！こがん寒かとお外におつたらお父さん、凍えてしまふばい。」

「ほんとね。」

ふふと笑って受付を済ます。ドーム船は人気だったが、朝一の便に乗ってきたお陰か無事に予約が取れた。ドーム船とは丸みを帯びた、ドーム状の船である。船として水上を動くものもあれば、高滝湖の船は動かない固定型だ。中へ入ると足元にフタがついており、フタをめくると穴があいていて、水中に繋がっている。ドームの中で座りながら、足元で釣る、ということなのだ。

ライフジャケットと竿のセットを借りて、手巻きの竿か自動で巻き取る電動リールか選べたので、少し高いが電動リールを選択した。この竿に仕掛けと呼ばれる糸をつけるのだが、仕掛けといってもスナップといって開いてカチリとはめて閉じればワ

ンタッチで付けることのできる簡単なもので。準備は概ね完成する。あとはエサに赤サシ、白サシ、いわゆるハエのウジムシをつけてゆく。白サシはそのままのウジムシで、赤サシは着色料で赤く色づけているものだ。色によって釣果、つまり釣れる量に差が出ると言われているが、人によっては迷信だと言う人もいる。私は前回釣果のよかった赤サシからつけてゆく。針に刺して、そのままでは大きすぎるので、もう一つの針に刺して、赤サシの真ん中をハサミでカットする。サビキ釣りと言うものは針が6〜8本あって今回は針が6本なのでこれを後2回繰り返す。エサがすべて付けられたら、仕掛けを足元の開いた穴、水の中へ垂らして釣りを開始した。ドーム船の中は室内に在ると同じくらい快適で、

「思ったより暖かいとねえ、後ろに寝転んで寝たら気持ちよかつちやろうね。」  
と、父が言うので

「寝るのはダメよ、飽きたらお終い！」  
と嗜めた。釣り始めて5分程で

「おい、見てみる！」  
コツリと父がこづいてきた。大声を上げるのはやめたようだ。

「じゃじゃーん。」  
小さいワカサギが1匹、ちょこんと付いている。

「ふふふっ、ちっさー！」  
「でも1匹は1匹よ。」

自慢げに父が言う。そういえば、父はいつもそうだ。釣りに行く

と毎回一番最初に釣り上げる。が、残念な事にそれは続かず、しばらくするとパツタリと音沙汰なくなるのだった。

「見て見て、底が釣れるよ。」  
やっとならば1匹釣れた。

「お父さんも底でしよるとけどねえ。」

「エサ取られてるんじゃない？」

リールを上げる父、

「巻いてみたら、釣れとった！」

「釣れてるじゃん、すごーい！」

「イエーイ！2匹目。」

はははと2人で笑って、この後は2時間もすると、父が飽きて、おきまりの

「まだ帰らんとー？」

が始まったがせつかくここまで来たんだから、と結局最後までいる事にした。

釣りを終えてドーム船を出る頃には既に日が傾きはじめ、湖面に夕日が近づき光をいっそう反射していた。冷えた空気が澄み渡って、眩しいくらいにキラキラしていて。早朝見た湖面とは全く別の姿をしていた。

「これよ、これ！これを見せたかったの！」

私が歓喜の声を上げると、父は目を細めて、湖面を眺めながら呟いた。

「そうか……。ありがとね。」

「うん。」

目を細めるのも父の癖だと思った。もう今日で見れなくなるのかもなと考えると突如、これで本当に最後なのかという気持ちが溢れてくる。少しの沈黙の後、父が口を開いた。

「あのさ、」

「うん、」

思わず声が震えた。

「…やっぱ、なんもなか。」

「えー、なによー？」

息をのむほど美しい景色と、父の寂しそうな横顔に涙が出そうで、それを何とかごまかして。零れ出しそうな悲しさに胸がいっぱいでそれ以上、何も聞けなかった。

2023年8月30日父のガンが発覚した。ステージ4、余命半年。絶望してしまう可能性があるのですが、本人には知らせないとのこと。告知から2ヶ月が経過したこの日、今回の旅は、父と私の最後の旅だったのだ。

結局ワカサギは2人で12匹釣れて、冷凍庫には今もなお父の釣った小さなワカサギが1匹だけ、秘かに残してある。あの後3ヶ月、地元の長崎で介護をして父を見送った。季節は冬だった。春の菜の花を待たずして、父は去ってしまった。しばらくするとある程度心の整理はついたが、まだなんとなく父の残した物が形として目に見えないと寂しいのだ。

父はあの時何を伝えようとしたのだろうか。聞けなかった事を少しだけ後悔しては、未だに頭の片隅で自問自答している。死は誰にでも平等に来る。そしてあの日の夕焼けは、あの日しかな

い。私も1日1日を大切に、日々を夕焼けのように燃やしつくそうと決めた。